
大人のための異文童話集13 牽牛と織女

天野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人のための異文童話集13 牽牛と織女

【Nコード】

N2754M

【作者名】

天野久遠

【あらすじ】

7月7日は七夕。年に1度ベガとアルタイルが出逢う天空のロマンスです。

織姫と彦星のお話は有名ですが、そんな二つの星のお話に、もうひとつ“天の子たち”の内緒のお話を加えてみました。

七月七日、雨に天空も曇ります。

一年にただ一度の逢瀬。

それを楽しみにして東西に、別れて、別れの、こころ二つ、想い二つ。

そんな二人を遮るように悪戯な雨。

大河の岸で落胆する二人を見兼ねたのでしよう。

どこからともなくやって来て、二人にやさしく手を伸ばす、カササギの群れ。

牛飼いの牽牛と機織り娘の織姫の物語り。

生あるときの想いをそのままに、

“七夕”と呼ばれる、逢瀬の宵の来たるる天空を待ち焦がれ、星の大河、天の川を挟んで煌めくふたつの宿星。

それは仲睦まじく暮らしていた夫婦のお話でした。

牽牛は喜びのあまり自分のすべき仕事もそのままに、かわいい織女を、来る日も来る日も見ては暮らしました。

そしていつしか、牛飼いの仕事もしなくなっていました。

共に暮らし毎夜に愛おしみ、それだけでいいと思っていた牽牛。

そんな暮らしは、いつしか織女の身体を蝕みました。

病にかかっても働き続ける織女。

それでも織女は、牽牛が喜ぶ顔だけ見られればよかった。

いつでも自分を誉めてくれて、いつでも優しく愛おしんでくれる。ただそれだけを糧として、病になりながらも働き続けたのでした。

そんな織女は、やがて病に倒れてしまします。

始めて牽牛は後悔しました。

日々の糧を、すべて織女に負わせていたことを。

牽牛は昼も夜もひたすら織女を看病したのです。

しかしそれも長くは続きませんでした。

織女が天へと召される時が来たのです。

病の床にあっても笑顔を絶やさなかった織女。

それはいつのときでも、牽牛が望んだものだから…最後の時までと。

牽牛にもそのことは十分に伝わっていました。

牽牛は手を握り頭を撫でながら言いました。

「お前一人を逝かせはしない。」

すると織女はにっこりと笑ってこう答えました。

「お前さまは私のために、これからたくさん生きてください。」

「私は天の神様にお願ひして星となりましょう。」

「お前さまが宵にひとり寂しくないように、いつでも私の姿が見えるように。」

「私はお前さまがいつも喜んでくれたように、星となって笑顔を輝きに変えます。」

織女はそう答えると、そつと息を引き取ったのでした。

それを聞いて織女を迎えに来ていた天の子たちも泣きました。

そして天の子たちは牽牛にこう伝えたのです。

「織女とはこれほど清らかで美しい魂です。」

「天へ昇ればきつと天帝さまが養女に迎えることでしょう。」

「そして織女は織姫と名を変えて、いつでもお前に分かるように、天の川の東岸で、ひととき輝く星となるでしょう。」

「だからその織女の身体は、舟に乗せて大河に流しなさい。」

「そうしてお前はこれからひとり、私たちが迎えに来る時を待ちなさい。」

牽牛は言われた通り、織女の身体を舟に乗せて大河へと流しました。

しかし牽牛は思い惹かれるままに、流れる舟を追い掛けたのです。やがて対岸では追い付かなくなってしまい、牽牛はとうとう河へと飛び込みました。

そうやって牽牛は、織女の身体を乗せた舟を泳いで追いました。

それはどこまでもどこまでも、牽牛の力がつきてしまうまで。

やがて力つきた牽牛は、そのまま川の底へと沈んでしまいました。

遠のく意識の中で織女が最後にいった言葉が蘇ります。

「お前さまは私のために、これからもたくさん生きてください。」

牽牛はその言葉に答えるように言いました。

「お前のいない日々を、どうして私が過ごしていくことなどできるのか。」

「いつまでもお前を見続けて、お前と一緒に在るだけでよかったのに……」

それが牽牛の最後の言葉となりました。

それは遠い遠い昔の7月7日の出来事。

天の子たちはこの日の宵に話します。

牽牛の魂は気がつくと、西の海岸へと辿り着いていたのだと。

牽牛はそのまま天へと召され、織女を追って今でも天の川を探して

いるのだと。

そんな不憫な牽牛の魂を哀れんで、天帝様は、そつと織姫の対岸の星にしてあげたのだと。

そして年に一度だけ想いが叶うように、そつとふたつの星を、出逢わせてあげているのだと。

その日もし、天の川が豪雨に見舞われれば、天の子たちはこっそりとカササギを連れて行きます。

それは七夕の宵にだけ話す、天の子たちの内緒のお話なのでした。

（後書き）

BGMにはLyrico（露崎春女）の“キセキノハナ”をお勧めします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2754m/>

大人のための異文童話集13 牽牛と織女

2010年10月13日14時19分発行